文献紹介

海外舞踊学文献紹介（フランス）

岡見　さえ

近年，フランスでは舞踊関係の書物が多数出版されている。それらが扱う舞踊の種類，研究の領域は多岐に渡り，舞踊に対する関心の多様化と研究の活況をうかがわせる。ここでは2008年から2009年の出版の中からいくつか挙げたい。

まず辞典では，2008年に *Dictionnaire de la Danse*, Larousse（『ラルース・ダンス辞典』）とEugenio Barda *L'énergie qui danse : un dictionnaire d'anthropologie théâtrale*, L' Entretemps（『踊るエネルギー：演劇人類学辞典』）の新版が出た。前者の重要性は言うまでもないが，後者も「演劇人類学」（演劇に留まらず何かを再現する際の人間の行動に関する学）に拠り，具体的な身体部位の動きから“気”の操作などの抽象概念に至るまで，豊富な図版と共に異なる時代や文化圏における演劇や舞踊の表現に通底する意識や技術を解説し，興味深い。

舞踊史では，Jean-Michel Guilcher, *Danse traditionnelle et anciens milieux ruraux français : tradition, histoire, société*, L' Harmattan, 2009（『伝統舞踊と古いフランスの農村：伝統，歴史，社会』）が，農村の伝統舞踊は19世紀を通して劇的な生活様式の変化に従って大きく姿を変え，今日われわれが民俗芸能と呼び保存している舞踊は変容の後の最終形に過ぎないことを示す。また，アジア諸国の16人の振付家や研究者の参加によるフランス国立ダンスセンターの*Danses et identités : de Bombay à Tokyo*, Centre Nationale de la danse, 2009（『ダンスとアイデンティティ：ボンベイから東京まで』）が，この分野のこれまでの欠落を補い，地域固有の社会・政治性の影響を受け変遷を遂げたアジアのダンスの現在と過去の諸相を紹介する。

コンテンポラリーダンスでは，『ル・モンド』紙の舞踊評執筆者ボワソーによるRosita Boisseau, *Panorama de la danse contemporaine : 100 chorégraphes*, Textuel, 2008（『コンテンポラリーダンスのパノラマ：振付家100人』）がこの分野を総合的に紹介する。振付家自身が執筆した書籍にも注目したい。2008年にレンヌ国立振付センターのディレクターに就任したシャルマッツのBoris Charmatz, *Je suis une école : Expérimentation, Art, Pédagogie*, Les prairies ordinaires, 2009（『私は学校：実験，芸術，教育学』）は，2003年から20-30代のダンサー，医師，作家，美術家，音楽家等を集めた現代社会における芸術創造とその伝達（教育）のありかたを問う活動の記録であり，現行の文化政策への批判でもある。Salia Sanou, *Afrique, danse contemporaine*, Ed. Cercle d'art, 2008（『アフリカ，コンテンポラリーダンス』）は，マチルド・モニエのもとで踊った後に故郷ブルキナファソでフランス型の振付発展センターを設立したサヌーのアフリカでのコンテンポラリーダンスの受容と展開の証言であり，アフリカの視点から80年代以降のヨーロッパのダンス状況が語られる。

フランスでも注目されているダンス・セラピー関連では（この分野の博士論文は近年多く提出されている），バルテニエフの基本６エクササイズとその発展形をラバン記譜法によって分析するJacqueline Challet-Haas et Angela Loureiro, *Exercices fondamentaux de Bartenieff : une approche par la notation Laban*, Ressouvenances, 2008（『バルテニエフの基本エクササイズ：ラバン記譜法によるアプローチ』）の増補版が出た。

最後に，舞踊理論の考察であるFrédéric Pouillaude, *Le désœuvrement chorégrapique : étude sur la notion d'œuvre en danse*, Vrin, 2009（『振付の非-作品：舞踊における作品概念に関する研究』）を挙げる。舞踊は瞬間に消滅する芸術であり，哲学・美学はそのかりそめの美の秘密を捕え，永遠のものとする努力を重ねてきた。本書は，マラルメ，ノヴェール，ラバン，アルトー，ジュネットらが，テクスト性，宗教性，他者性，超越性といった概念を鍵として展開した舞踊論を検証し，こうした言説はムーヴメントを作品の不在やその消滅の経験において語るゆえ，それは舞踊の本質よりむしろ振付作品に内在する儚さ（非-作品と著者の呼ぶもの）を指し示していることを明らかにする。

文献紹介

海外舞踊学文献紹介（ドイツ）

中島那奈子

Odenthal, Johannes: *Tanz Körper Politik: Texte zur zeitgenössischen Tanzgeschichte*, Berlin: Theater der Zeit 2005.

Brandstetter, Gabriele: »Verflechtungen von Tanzkulturen. Pichet Klunchun und Jérôme Bel«, in: Weiler, Christel u.a. (Hg.): *Strahlkräfte: Festschrift für Erika Fischer-Lichte*, Berlin: Theater der Zeit 2008, S.16-27.

Odenthal, Johannes: »Globalisierung, Migration und die Interkulturalität von Performance«, in: Klein, Gabriele u.a. (Hg.): *Performance: Positionen zur zeitgenössischen szenischen Kunst*, Bielefeld: Transcript 2005, S.25-31.

Odenthal, Johannes (Hg.): *The Third Body: Das Haus der Kulturen der Welt und die Performing Arts*, Berlin: Theater der Zeit 2004.

現在ドイツを中心にヨーロッパで影響力のあるダンス誌*ballet-tanz*を公刊しその編集を担っていたヨハネス・オーデンタールは，この著書*Tanz Körper Politik*においてもダンスの理論研究を，コンテンポラリーダンスの作品やアーティストとのインタビューといった具体例と結びつけることを試みる。オーデンタールは，過去10年のドイツでの文化政策におけるテーマとして，知の構築及び芸術の新しいメディアとして身体が再評価されてきたことと，インターカルチュラリズムと移民問題を通して文化的アイデンティティが再定義されていることの二点を掲げ，それを「ダンス」「身体」「政治」の三部構成から成る本書で展開している。

第一部「ダンス」の項では，イサドラ・ダンカン，ルドルフ・フォン・ラバン，マーサ・グラハム，ジャドソン教会派，劇場空間についての舞台美術史における議論から，ウィリアム・フォーサイス，ゲルハルト・ボーナー，ヤン・ロワース（ニードカンパニー）などの現代のアーティストの作品が，脱神話化，レパートリーの再演，民主主義といったキーワードと共に読解される。第二部「身体」の項では，コフィ・ココ，大野一雄，ヤン・ファーブルの作品やインタビューが，アーカイブ，主体規定，ジェンダーなどのテーマを用いて議論される。第三部「政治」の項では，芸術における政治学の問題が取り上げられる。ここでは，イズマエル・イヴォのインタビューや，オクウィ・エンヴェゾーによる現代美術展第11回ドクメンタのキュレーション，ベルリンの世界文化の家（das Haus der Kulturen der Welt）での自らのキュレーションを例に，ドイツ文化の新しいアイデンティティの構築が，人種，インターカルチュラリズム，グローバル化，歴史と記憶の問題を通して考察される。オーデンタールは，芸術と文化の新しい政治学が最も顕著になるのは，フェスティバルや国際交流プログラム，移民問題といった異文化間の対話においてであると述べる。

芸術研究におけるインターカルチュラリズムの議論の高まりは，エリカ・フィッシャー＝リヒテが主宰するベルリン自由大学での国際研究プロジェクトVerflechtungen von Theaterkulturenとも呼応する。そのメンバーでもある舞踊学のガブリエレ・ブラントシュテッターは，論文Verflechtungen von Tanzkulturen. Pichet Klunchun und Jérôme Belの中で，ジェローム・ベルの作品『ピチェ・クランチェンと私』での異文化間の対話構造を分析し，ヨーロッパ中心主義やグローバル化の問題と絡み合わせ，ダンス文化間の受容における差異を他者論として肯定的に掘り下げている。

しかし，芸術作品の政治化は，ダンスに市場価値を生み出し，ダンスする身体の差異を搾取し均一化する，文化帝国主義が現われる危険性も孕んでいる。この危険性に関して，オーデンタールは，論文Globalisierung, Migration und die Interkulturalität von Performanceの中で，ヨーロッパ中心主義の立ち位置を相対化する為には，異文化間のアート・プロジェクトを政治的負い目から執り行うよりも，各文化の受容美学モデルを反映させ再文脈化を図るべきだと主張している。

このようなオーデンタールの主張は，実際のフェスティバルのキュレーションとしても具体的に提示される。1997年からキュレーションに関わっている世界文化の家において，オーデンタールは前述の本でも取り上げるテーマThe Third Bodyを，2004年のパフォーマンス・フェスティバルIN TRANSITのテーマに設定する。この世界文化の家は，米国政府の影響下でベルリンにおける欧州圏外のアーティストの作品発表の場となっており，2004年発行の独英併記の展示カタログは，「地域的視点」「作品」「パフォーマンスとポストコロニアリズム」の三部で構成されている。アジア，アフリカ，アメリカ大陸出身のアーティストの言説及び作品が，在ＮＹ研究者アンドレ・レペッキとメイ・ジョセフによる論考と共に収録され，オーデンタールのキュレーションの下でコンテンポラリーダンスが見る者一人一人に問題意

識を問うメディアとなっていることが伺える。

インターカルチュラリズムやポストコロニアリズムを，国内の人種・文化論へと回収する米国のダンス論と異なり，ドイツにおけるこの議論は，他者と混じらない絡み合いや摩擦として語られる。そして，オーデンタールの書に通呈して流れるのは，欧米のコンテンポラリーダンスの閉鎖性に対する問題意識と，歴史的に主体となってきたヨーロッパ人であってしまうオーデンタール自身の矛盾及び葛藤である。この著書*Tanz Körper Politik*の中で，欧米圏外のダンスをコンテンポラリーダンスではなく伝統舞踊と分類するヨーロッパの戦略的美学を糾弾するのは，アフリカ・ベナン出身のコフィ・ココやブラジル出身のイズマエル・イヴォであって，オーデンタールはその主張をドイツ人としての立ち位置からなぞるにすぎない。また，本文中ダンスソロの形式と近代的自我とを結びつける箇所では，舞踊研究において世界舞踊史としての読み直しが始まっている中でも，欧米中心の舞踊史・美学に依存せずには批評が成立しない自らの矛盾を露呈してしまう。

大野一雄を始め，本文中には日本に対する言及も多い。日本国外での舞踏の興隆と比較し，日本国内でのバレエの人気は日本人の他者文化へのエキゾチシズムに裏付けられていることを指摘する件は，このような他者論の視点が日本の舞踊研究では欠けていることを，改めて意識させられる。